

# 「聞き書き」の自己分析

## ～「オープンな対話」の可能性～

Self-Analysis of the Listening-and-Writing Approach: The Potential of Open Dialogue

本稿では、私が勤務する高齢者通所介護施設・デイサービスすまいるほーむで、利用者の提案で作った「すまいるかるた」の製作のプロセスを、それを記録した映像をもとに分析することで、私が介護現場で実践してきた「聞き書き」の特徴と具体的な方法について示していく。介護現場での「聞き書き」は、その実践の積み重ねの中で、聞き手である私と語り手である利用者との「1対1の閉じられた対話」から、他の利用者やスタッフたちも巻き込んで自由に展開されていく「オープンな対話」へと開かれていった。それによって、閉塞的になりがちだった介護現場そのものの雰囲気やそこに集う人たちの関係性が好転し、介護現場が利用者にとってもスタッフにとっても互いの存在を認め合い、思いやれる心地よい居場所になっていったのであった。

こうした「オープンな対話」による「聞き書き」で作った「すまいるかるた」の製作プロセスを分析してみると、「聞き書き」は民俗学の知識とか、あるいは相談援助の技術といった専門性がなければできないわけではない、ということが分かってくる。むしろ、聞き手となるスタッフが圧倒的な力でもって先導的に語りを引き出したり、方向性を決めたりするのではなく、そこに参加する利用者やスタッフ等、立場や経験の異なる多様な人たちの言葉のやり取りが重なり合うことによって、必然的に語りが深まり、より洗練されたかるたが創り出されていくのであり、それを楽しめばいいのである。「オープンな対話」による「聞き書き」がもっと気軽に広がり、介護現場がより豊かで創造的になることを期待したい。



In this study, video recordings were used to analyze the process of creating Smile Cards (*sumairu karuta*), which was proposed by a client of Smile Home, a senior day-care center where I work. This paper describes the characteristics and specific methods of the listening-and-writing approach that I have used in actual nursing care. As the approach was continually used in nursing care, closed person-to-person dialogue between a day-care center client (the speaker) and me (the listener) evolved into free open dialogue involving other clients and staff members of the center. Through this dialogue, the atmosphere of the center and the personal relationships there, which had tended to be inward-looking, started to improve, and the center became a place of mutual respect and sympathy—a comfortable place for both the clients and staff members. Smile Cards were created based on such open dialogue that emerged from the listening-and-writing approach. Analysis of the process of creating them revealed that the listening-and-writing approach does not require folkloristic knowledge or expertise in providing consultation and assistance. Dialogue would not be successful if the listeners (i.e., staff members) were to set the course of stories or pressure the speakers to tell desired stories. Dialogue naturally deepens as the participants (clients and staff members) exchange words based on their diverse circumstances and experiences. Smile Cards were refined as a result of such deep dialogue. This process should simply be enjoyed. I hope that the listening-and-writing approach with open dialogue will be used more freely and widely, and that nursing activities will become more fulfilling and creative.

## 1 「すまいるかるた」から「聞き書き」を分析する

今回私が寄稿させていただくことになったのは、「Creative Aging」という特集だが、創造的な高齢者の活動としてここで取り上げたいのは、私が管理者を勤める沿津市の高齢者通所介護施設・デイサービスすまいるほーむでの「すまいるかるた」作りのことである。

「すまいるかるた」は、デイサービスすまいるほーむが昨年15周年を迎えたのを記念して、利用者さんの提案で作りはじめたものである。利用者さん、スタッフを含めたすまいるほーむのメンバー全員について、その経験や今の思いについて「聞き書き」をして、みんなで協力してそれぞれ読み札にまとめたのであった。利用者さんとスタッフとの共同作業によって作り上げられる「すまいるかるた」は、まさに高齢者の介護現場の創造性のひとつの形だと言えるだろう。

たとえば、こんな読み札がある。

「急な斜面はお茶畑に適してる。寒さが下っちまって、霜が降りないから。そんなことは常識だよ。それが根本だよ。」(かるた1)

愛鷹山麓で専業農家をしていた利用者さんが教えてくれたお茶作りの方法である。確かな経験から紡ぎだされた言葉は、説得力がある。

あるいは、心に秘めていた本音を語ってくれた方もいる。

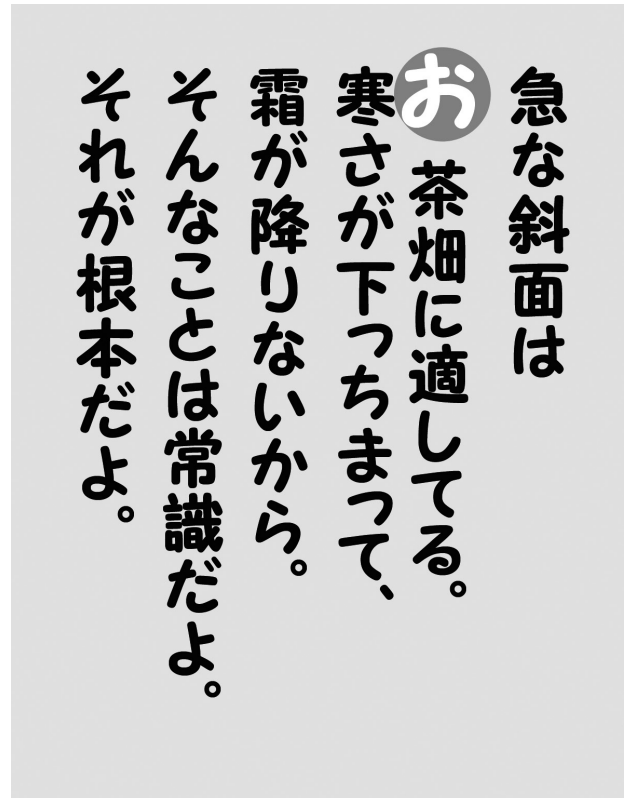
「結婚の世話をしてくれた姉さんには言えなかったけれど、本当はタケユキさんと結婚したかった。」

初恋の相手との遂げられなかった思いが、かるたに刻み込まれている。

こうしてできあがった「すまいるかるた」はレクリエーションのひとつとして楽しまれており(写真1)、その様子や、「すまいるかるた」の特徴については、医学書院のwebマガジン『かんかん!』(<http://igs-kankan.com/article/2016/07/001010/>)にて映像付きで紹介しているので、ぜひ、そちらを読んでいただきたい。

本稿では、「すまいるかるた」作りのプロセスについて、

かるた1



出所：デイサービスすまいるほーむ

その様子を撮影した映像をもとに分析していく。なぜなら、そこには、私が「介護民俗学」と称し、介護現場で実践してきた「聞き書き」の特徴が凝縮されていると思われるからである。

「介護民俗学」は私の造語であり、民俗学を専門に研究してきた私の経験から、民俗学的な関心や方法によって、利用者さんの人生や経験について話を聞くことで、利用者さんを理解し、思い出を共有するとともに、その個人史から彼らの生きてきた時代や地域の歴史、生活の在り方について知ろうとする試みを、そう名付けたのであった。

介護民俗学の方法は、「聞き書き」である。聞き書きは、失われつつある地域の記憶を次世代に継承していくことを目的とした民俗学で伝統的に行われてきた手法である。そこでの基本姿勢は、地域において多くの経験や民俗的知識を有する存在である高齢者に語り手となってもらい、研究者は、彼らに「教えを受ける」という立場で話

写真 1



出所：デイサービスすまいるほーむ

を聞かせてもらうということである。介護民俗学においてもこの基本姿勢は貫かれる。だから、常に介護される側にある利用者さんたちは、聞き書きの場では、聞き手となるスタッフに「教える」という立場になる。つまり、聞き書きによって、利用者さんの人生が立体的に浮かび上がってくると同時に、利用者さんと介護スタッフとが、「介護される人／介護する人」から、「教える人／教えられる人」へとその関係性が一時的に逆転するのである。そうした関係性の逆転により、明らかに、スタッフである私と利用者さんとの関係は、「介護する／される」を超えて人と人として向き合えるようになり、それが結果的にはより深いケアにつながっていったように思う。

そうした、介護民俗学の聞き書きの具体的な実践については、ぜひ、『驚きの介護民俗学』（医学書院）、『介護民俗学へようこそ！—「すまいるほーむ」の物語』（新潮社）をお読みいただきたいのだが、ここで改めて強調しておきたいのは、私が介護現場で始めた利用者さんへの聞き書きは、聞き書きの場や表現の形を変えていくことで、

聞き手である私と語り手である利用者さんとの「1対1」の閉じられた対話から、他の利用者さんやスタッフたちも巻き込んだ「オープンな対話」へと開かれていっている、ということである。

介護現場での聞き書きは、以前に勤めていた大規模施設での環境により、個室で利用者さんと私とが2人だけになって行く「1対1」の対話で始めた。ちなみに、ここで「対話」と言っているのは、聞き書きが一方向的に聞いたり、一方的しゃべったりするものではなく、聞き手と語り手とのやり取り、つまり対話によって展開していく、ということを強調したかったからである。その点は、書き手のモノログである「自分史」との違いでもある。

そうした「1対1」の対話による「聞き書き」では、利用者さんの経験を長時間にわたって、深い所まで聞くことができる。そして、その成果を私は、『思い出の記』という冊子にまとめて、利用者さんや家族へとプレゼントしたのだった。それは、利用者さんに「宝物」と喜んでいただけたこともあった。だが一方で、「聞き書き」における

関係の深まりは、その利用者さんと私との間に閉じられていて、他の利用者さんやスタッフたちへと波及していくものではなかった。

ところが、4年前に勤務先を移したデイサービスすまいるほーむは、民家を借りた小規模の施設であったため、1対1で聞き書きができる個室もなければ、1対1でじっくり時間をかけて話を聞くことができる人間的な余裕もなかった。ましてや、管理者という立場であるゆえの責任も以前の職場より何倍も大きくなり、1対1での聞き書きに集中するのはますます難しかった。そこで苦肉の策として始めたのが、みんながいるデイルームでひとりの利用者さんに対して聞き書きをする、ということである。しかも、それを他の利用者さんもスタッフも含めたみんなで聞いて、みんなでそれを形に表現して、そしてみんなでその人の思い出を共有していこう、とそのスタイルも、いわば「オープンな対話」へと開かれていった。

たとえば、ある利用者さんの子供の頃によく母親が作ってくれたという料理を「思い出の味の再現」と称して、みんなでそのレシピからそれにまつわる思い出を聞いてから、調理して再現し、みんなで味わうということを行ったりした。また、ある利用者さんにみんなで聞き書きをして、それをスタッフが「人生すごろく」というすごろくに作り上げて、レクリエーションの時にみんなで遊んだりした。

このように、聞き書きが「オープンな対話」に開かれていくことによって、聞き書きの場とそこで語られた内容が、その場に参加したメンバーみんなに共有されていくことになる。それによって、互いへの関心や理解は深まっていき、明らかに、メンバー同士（利用者さんとスタッフだけでなく、利用者さん同士も）の関係に変化が生じていった。そして、そうした積み重ねが結果的に、「すまいるほーむ」という場所が、利用者さんにとってもスタッフにとっても、互いの存在を認め合い、思いやれる心地よい居場所になることにつながっているのではないかと、私は感じている。つまり、介護現場での「聞き書き」は、

1対1から、多様な人たちに開かれていくことによって、閉塞的になりがちな介護現場そのものの雰囲気やそこに集う人たちの関係性を好転させていく、そういう力をもつのではないかと、ということである。

そこで、本稿では「すまいるかるた」作りでの「聞き書き」を、映像をもとに細かく分析してみることで、「オープンな対話」による「聞き書き」とはいったいどのようなものであり、どんな可能性を持っているのかを示してみたい。それは、私にとって初めての、「聞き書き」の実践の自己分析であり、これからさまざまな介護現場で「聞き書き」に興味をもった人たちが実践をしていくための、方法の提示になるのではないかと、思う。

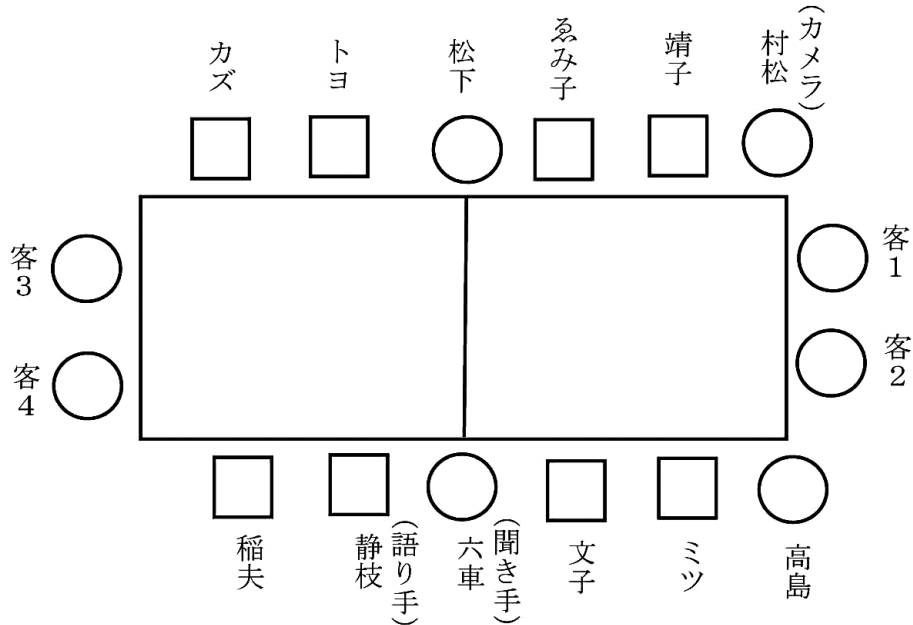
## 2 | 映像をもとに「聞き書き」の場を再現する

参加する多様な人たちに開かれた「聞き書き」であることの特徴をとらえるために、本稿では、映像をもとに、言葉のやり取りだけではなく、誰が誰に向かって話をしているのか、その時どのようなしぐさをしているのか、どのような表情をしているのか、等にも注目して、聞き書きの場全体の在り様をできるだけ分かりやすく再現することを試みる。それによって、そこで繰り広げられるやり取りの意味がより一層鮮明に浮かび上がってくるのではないかとと思われる。

そこで、分析の対象とする映像だが、今回は、「すまいるかるた」作りの様子を撮影したいくつかの映像の中から、平成28年4月9日に行った、昭和4年生まれの静枝さんのかるた作りの映像を使うことにする。この4月9日の聞き書きは、千葉の福祉系大学の教員と学生の合計4名が参加した回であり、いつものメンバーだけではなく、外部から初めて参加する人に聞き書きが開かれていく様子が分かるはずである。

また、聞き書きでの互いのやり取りを再現する手がかりとして、図1に当日の座席図を示した(図1)。ここに示したように、千葉からのお客さんも入れて全部で16名が参加し、利用者が普段過ごしているデイルームで、二並び長方形のテーブルをぐるりと囲んで聞き書きを行っ

図1



出所：著者作成

たのであった。その際、聞き手である私は、語り手である静枝さんの右隣に座った。状況にもよるが、私が聞き書きを行う場合、たいがい、語り手の左右どちらかの隣に座ることが多い。それは、近くにいた方が私自身が話しやすいし、語り手の言葉を聞き取りやすいということもある。また、語り手側から私のメモを見やすい位置であることもある。

私の聞き書きの経験から言って、語り手は聞き手がとるメモに興味をもち、覗き込んでくることが多い。私も積極的にメモを見せて、細部を確認するし、またそこから話が展開することもよくあるのである。さらに今回のかるた作りの聞き書きでは、後述するように、語られたことをまとめて読み札を作る作業も、語り手と協働しながら進めていくので、メモの用紙もA4サイズのコピー用紙を使い、できるだけ語り手にも読める大きさの文字で書き留めることを意識した。

また、聞き書きをする際の座席については、特に決まりを作っているわけではないが、状況に応じて配慮することもある。今回は、耳の遠い利用者の糸み子さんの隣にスタッフの松下さんが座って、静枝さんの語りの要点

をハンディタイプのホワイトボードに書いて伝えてくれた。要点をまとめた文章を書くので、静枝さんの語りや、他の人とのやりとりのすべてを逐語的に伝えられるわけではないが、スタッフによって文字で要約して伝えることによって耳の遠い利用者でも聞き書きに参加しやすい環境になることは確かである。

次章から示していく会話は、映像から起こしたものであるが、この時の聞き書きは、読み札作りまで合わせると約1時間かかっているのので、与えられた頁数からしてすべてを掲載することはできない。そこで、聞き書きの特徴が顕著に表れている個所や、最終的にまとめあげた静枝さんの読み札の内容にかかわる個所に絞って示し、分析していくことにする。

ちなみに、それぞれの会話の初めに発話者を示してあるが、スタッフについては苗字を、利用者さんについては名前を記してある。千葉からのお客さんについては、座席図に対応して、客1～4で示した。また、会話中の〈 〉には、誰に向かって話しているのかや、しぐさがともなう時にはその様子を記してある。

### 3 | 聞き書きは、聞き手の「もっと聞きたい衝動」から始まる

語り手である静枝さんは、すまいるほ一むのある沿津市の片浜地区に生まれ育った方で、地元の生活習慣や習俗、またかつての風景についてよく知っている片浜地区の生き字引のような方である。静枝さんは、普段の会話においても、漁業と農業とで営まれてきたこの辺の昔の暮らしがありありと思い浮かぶような興味深い話を私たちにしてくれるのであり、この日に私が静枝さんに聞こうと試みたのも、数日前の日常会話に登場した、浜にたくさんイワシが「はっちょがり」、静枝さんたちがバケツを持って拾いに行った、という話についてだった。「はっちょがる」とは、片浜地区の方言で、イワシ等の小魚が大量に浜に飛び上がってくることだという。この「はっちょがる」という言葉の調子のよさと、上がったイワシをいそいそと拾いに行ったという静枝さんの姿がなんとも魅力的に思え、私はこの話をもっと聞いて、かるたの読み札にしたい、と思ったのであった。

私たちが介護現場で行っている聞き書きとは、このようにまったく手がかりもとっかかりもない状態から始めるというよりも、入浴介助や送迎の時、食事をしている時等の何気ない会話の中に登場する話題に触発され、その話をさらに詳しく知りたい、聞いてみたい、そして表現してみたい、という聞き手の側の衝動から始まることが多い。

### 4 | 聞き書きはみんなを巻き込んだ「オープンな対話」で進んでいく

六車：静枝さんは、地元のことをよくご存じでいろいろな話を聞かせていただいているんですけど、今日ちょっと聞きたいなと思っていたのは、ここの浜のこと。

静枝：浜？〈六車へ向かって〉

六車：そう、浜、浜辺。海岸でさ、よく魚が捕れたとか言ってたよね。

静枝：捕れましたよ。〈六車へ〉大きな魚に追われてね、はっちょがるの。〈トヨさんへ〉

六車：はっちょがるのね。〈メモを取りながら〉

静枝：はっちょがるの。岸にね、波と一緒にさーっとながってくるの。〈トヨさん、カズさんへ・両手を胸の前でゆっくり伸ばして波が押し寄せる様子を示す〉イワシとか、アジとか。

トヨ：捕れたんだね

静枝：それがね、時々捕れるの。そうするとね、浜にいる衆が呼ぶの。浜で「おーい、おーい」って。〈トヨさん、カズさんへ・口元に両手を持っていて「おーい」と呼ぶ様子を示す〉

トヨ：は一。

静枝：「魚が捕れるからね、バケツ持って来るように」とか、「袋を持って来るように」とか。「今うんとはっちょがっているから、早く来るように」って。〈トヨさん、カズさんへ〉

トヨ：ああ、そう。

静枝：そういうふうに浜の衆が呼ぶの。〈トヨさんへ〉これは、聞き書きの始まりの部分だが、ここで面白いのは、聞き手の私が何の話を聞きたいと思っているのかを理解した静枝さんが、私に向いていた姿勢を直し、向かいに座っているトヨさんやカズさんの方へ即座に向きなおして、まるで舞台上の演者のように身振り手振りを交えて饒舌に語り始めたことである。その身振り手振りも、町内の祭りで毎年踊りを踊っていたという静枝さんだけあって、指を揃えてゆっくりと柔らかく動かし、優雅な舞のようである。

聞き手は私であるのだから、静枝さんは私に向かって語りだしてもいいようなものだが、最初から静枝さんは、私ではなく、向かいに座っているトヨさん、カズさんを意識して語りだしている。そうした静枝さんの語りかけに対して、真向いに座るトヨさんは、まるで歌や踊りの合いの手のように、タイミングよく、リズムカルに言葉を返している。この2人の気の合った掛け合いのパフォーマンスによって、聞き書きが、聞き手と語り手との1対1の「閉じられた対話」から、聞き書きの場全体を巻き込んだ「オープンな対話」へと開かれていっているのが映像

からよく見て取れる。

すまいるほ一むで始めた聞き書きは、空間の狭さや人手のなさといった物理的な制約から、みんながいる場所でひとりの利用者さんに対して聞き書きをする形をとらざるを得なかったのだが、その結果として、語り手となった利用者さんの語りや聞き手である私とのやり取りをみんなが聞いていることになった。最初はみんな少し退いて静観していたが、そのうちに自然とまわりの利用者さんやスタッフたちも語り手の利用者さんに質問をしたり、相槌を打ったり、それぞれがそれぞれのやり方で聞き書きの場に参加してきてくれるようになっていった。そして、今では、聞き書きを始める、となると、すまいるほ一むのメンバーは、それがみんなが参加するオープンな場であることを分かっていて、語り手も聞き手も、そしてまわりの利用者さんもスタッフもそれぞれの「役割」を自然と担っていくようになったのである。

特に、この日の聞き書きの語り手となった静枝さんは、長年民生委員や婦人会の役員を担い、地域のまとめ役でもあったから、その場での「語り手」としての「役割」つまり、その場にいるみんなにも分かりやすい語りをするこ—を即座に察して、その「役割」を演じてくれたのだろう。そして、この日は偶然にも、50年以上も料亭の女将さんとして働いてきたトヨさんが、静枝さんの真向いに座っていた。長年の接客の仕事によって身に着いた聞き役としてのトヨさんのタイミング良い相槌や言葉の返しによって、さらに静枝さんの語りは初めからどんどん調子に乗って展開していったのである。

誰にどんな「役割」を担ってもらうかは、スタッフの側が意図したり、お願いしたりすることはない。何か意図して始めても、経験的に言ってその通りにはならないことがほとんどだからだ。だからむしろ、その場の偶然性に任せてみる。そうすると、今回の静枝さんやトヨさんのような関係が自然とできて、その中で聞き書きが開かれていくこともあるし、あるいは、別な展開が見られるかもしれない。聞き書きが、聞き手と語り手の1対1に閉じられているのではなく(1対1だと行き詰ってしま

うこともあるが)、みんなが参加するオープンな対話に開かれていると、たいていの場合は誰かが何かの役割を果たしてくれ、互いにフォローし合いながら、聞き書きは何とか展開していくものである。

六車：へえ。ところで、さっきイワシとか何が捕れるって言った？〈メモを確認しながら〉

静枝：イワシとかアジも捕れるよ。〈六車へ・六車のメモを覗きながら〉

六車：季節によっても違うのかな。今ぐらいの季節だと何が来るの？

松下：ごめんね、静枝さん。今ね、千葉の方がね、「はっちやがる」ってどういう意味かって？

客4：「はっちやがる」って、どういう…。

静枝：海から上がるっていうこと。〈客4に向かって〉

六車：跳ね上がってね。

静枝：跳ね上がって、陸(おか)に逃げてくる。

客3、4：うんうん

まさに、この部分がそうである。以前から聞いて意味も知っていた「はっちやがる」という方言について、私は特に質問もせずに聞き書きを進めていたが、千葉から来たお客さんたちにとっては初めて聞く言葉であるはずだ。私が静枝さんに質問をしている傍らで、お客さんたちは、「はっちやがるってどういう意味かしら」と思いながらも、遠慮して質問できず会話から取り残されていたのだろう。その様子を察したスタッフの松下さんが、お客さんたちの疑問を掬い上げ、代わりに静枝さんに質問として投げかけているのである。

聞き手である私には、そのあたりの配慮がなかなか行き届かないが、日常的な介助の場面でも観察力に長けている松下さんは、その様子を見逃さず、しかもさりげなくフォローしてくれた。それによって、お客さんたちも、聞き書きに参加していくきっかけを得ることができたのだ。松下さんに助けられて、さらに参加者を巻き込んで、聞き書きは進んでいく。

## 5 | 新しい話題への遭遇—素直に驚き、興奮する

浜にイワシがはっちゃがり、それを捕りに行ったという静枝さんの思い出を読み札にしようとした聞き書きは、初めて聞く話題へと展開されていく。

客2：捕れたイワシはどうやって食べるんですか。

静枝：生で開いてさ、すり身にしてもさ。煮てもさ。目刺しにしてもさ。〈客2へ〉

客2：うんうん。

静枝：食べられるだけ食べたよ。だけどいっぱいだから食べきれないじゃ。だから、田んぼに差すの。〈トヨさんへ〉

六車：田んぼに差すの？なんで？

静枝：肥やしになるじゃ。〈六車へ〉

六車：えー、すごい。

静枝：稲を植えてあるでしょ、その根元に差すの。そうすると肥やしになるの。〈六車へ〉

トヨ：知らない。

六車：そのまま？生で？干したものを？固いの？

静枝：固くなきゃ差せない。〈六車へ〉

〈「そりゃそうだ」とみんな大笑い〉

六車：生だったら大変だ。腐っちゃうし。一日干せばいいの？

静枝：一日。いや一二日だっていいけど。

六車：からからになるまで干すんだ。で、肥料になるってこと。すごいな。

トヨ：初めて聞いたよ。

静枝：ほんと？知らない？〈トヨさんへ・意外だという表情で〉うちの方はそうだったよ、昔はね。すごいイワシが上がったからね。

当然、食べるためにイワシを捕りに行っていたのだと思っていれば、実はそれを田んぼに差して肥料にしていたという。この予想外の答えに、聞いている参加者は興奮気味。そして、たぶん一番興奮していたのは私で、驚きのあまり、頭に次々と浮かび上がってくる問いを矢継ぎ早に静枝さんに投げかけている。たとえば、かつて北海

道で大量に獲れたニシンから油を搾ってニシン粕にし、それが各地で肥料として高値で売れたことは歴史として知っている。けれど、イワシを丸のまま干して田んぼに差すなんてことは初めて聞く話で、その初めて遭遇する話に民俗研究者の好奇心が大いにくすぐられたのだった。静枝さんはそんな私の反応に逆に驚きながらも、ひとつひとつの問いに丁寧に答えてくれている。

聞き手であり、聞き書きの場の仕切り役である私が驚いたり興奮したりするのは、介護職としての冷静さを欠いた態度ではないのか、と批判を受けるかもしれない。だが私は、聞き手のこの素直な「驚き」や「興奮」こそが、介護職と利用者との関係を聞き書きの場面においては逆転させるきっかけとなり、そして、聞き書きそのものをより深く展開させていく原動力になっていると考えている。

素直に驚き、興奮する、ということは、聞き手の側の「無知」をさらけ出すことでもある。専門職として利用者の介助に関わったり、問題解決のために相談に乗ったりする場面では、専門的な知識・技術や情報は介護職の側に所属し、利用者はその提供を受ける立場にある。しかし、聞き書きの場面では、知識や情報を持っているのはあくまでも語り手となる利用者である。聞き手の側が予想もつかなかった新しい話題に驚き、興奮するということは、その立場の逆転を受け入れることなのである。

そして、聞き手の側の驚きや興奮は、語り手にも気づきを与えてくれるようである。今回の場合、浜に上がったイワシを田んぼに差して肥料にしていたのは、静枝さんにとっては特別なことではない、ごく当たり前の光景だったのであり、「どうやって食べるのか」というお客さんからの質問に答えながら、偶然に思い出し言葉にした事柄にすぎなかったはずだ。ところが、聞き手である私をはじめ、他の参加者たちもその言葉に驚いている。そこで初めて、それがとても珍しいことであり、面白いことなんだと静枝さん自身が自覚したのではないだろうか。

聞き書きの醍醐味とは、聞き手にとっては、知らなかった事柄を知る喜びであり、語り手にとっては、聞き手を



介して、自らの経験や人生に改めて価値を見出し、言葉を与えていく作業の面白さなのではないか、と思う。

## 6 | ルールなき聞き書き—ただ大人としての配慮のみ

さて、こんなふうにもんがが興奮して聞いている最中、松下さんが再び言葉を挟んだ。

松下：ごめん、糸み子さんが質問があるって。〈六車へ〉

六車：何？

松下：静枝さんは兄弟は何人ですか。話は違うけど。〈静枝さん、六車へ〉

六車：大丈夫。〈松下さんへ〉いいよね。〈静枝さんへ〉

静枝：〈糸み子さんに向かって指で7を示す〉

松下：7人だって。〈糸み子さんの耳元で〉

糸み子：うんうん。

静枝：7人だけど、もう5人亡くなった。

松下：〈糸み子さんに筆談〉

糸み子：5人も亡くなった。早死にだね。〈静枝さんへ〉

六車：じゃあさ、イワシも、7人兄弟でみんなでガーッと捕りに行ったの？ 〈静枝さんへ〉

静枝：兄さんたちは大きいからさ、仕事に行ったりしていないじゃ。だからいる人が行くの。〈六車へ〉

六車：それはそうだよ。〈笑〉

松下さんは、話題が面白く展開している途中でそれとは関係のない質問をするのは申し訳ないとためらいながらも、糸み子さんの質問をここでも掬い上げてくれている。耳の遠い糸み子さんには、松下さんがホワイトボードで要旨を書いて伝達してくれているために、話題が糸み子さんに伝わり理解されるまでに時間がかかり、実際その場で展開されている話題とはどうしても時間差が出てきてしまう。だから、糸み子さんからの質問は、かなり前の話題に関わるものだったり、その場の話題とはまったく別の唐突なものだったりすることが多いのだ。けれど、それを誰ひとりとして咎めたり、嫌がったりすることはない。また、話題が中断されることで混乱したりす

ることもない。実際、静枝さんも何も嫌な顔をせずに、それまでの話はひとまず置いて、糸み子さんの質問に丁寧に答えている。

そんな寛容な雰囲気ができるのは、聞き書きを始めた当初から、聞き書きの場に何の決まり事も作らなかったからではないか、と私は考えている。決まり事を作らなかったのは、たとえば、認知症の療法として注目されている回想法のように、あらかじめテーマや方向性、終着点を決めておいたり、聞く環境やメンバー、方法等決めておいたりするのは、あまりに窮屈すぎて誰も聞き書きを楽しめないのではないか、と思ったからである（実際、私はまったく楽しくないし、それではかえって聞きたいことも聞けないし、話したいことも話せない）。そして、利用者さんたちもスタッフも大人として常識程度に相手への気遣いさえできれば、特に「してはいけない事」等ルールを決めずとも、かえってその場の状況によって話題が自由に展開し、聞き書きがより面白く、深くなるのではないかと期待しているからである。その自由さが聞き書きの楽しさや参加しやすさにつながっているのではないだろうか。

もちろん、参加者全員が常に常識的な気遣いをもって聞き書きに参加できるというわけではない。たとえば今回の場合、アルツハイマー型認知症の進行した靖子さんは、言葉の意味は理解できるが、その場の雰囲気や状況を理解するのは難しい。しかも、強い口調で相手を攻撃してしまったり、語り手の語りを意に介さず、自分の話だけを大声で繰り返したりする傾向にあり、相手へ配慮をするとか尊重するといった態度はなかなか望めない。この時も私や静枝さんの言葉に反応し、攻撃的な言葉を発し始めたのであるが、聞き書きの様子をビデオ撮影していたスタッフの村松君がさりげなく靖子さんの隣に座り、ビデオを撮影しながら、靖子さんをなだめたり、そこで展開される話題を分かりやすく説明し直してくれたりしたため、靖子さんの攻撃性も多少は治まり、聞き書きを続けることができたのであった。

聞き書きの自由な雰囲気は、その場を大切にしよう

してくれる、こうしたスタッフたちや利用者さんたちの理解とさりげない配慮によって支えられているのである。

## 7 | 映像として結べるまでしつこく聞くー「表現する」ために聞く

糸み子さんの質問から話題が兄弟の話に移っていったのであるが、時間の制限もあることから、その話題が一段落したところで、私は、一時中断していたイワシを差す話に戻していった。

六車：ちなみにさ、さっきのイワシの話だけど、どうやって差すの？頭からこうやって？〈静枝さんに向かって・人差し指を下にして差すしぐさ〉

静枝：そうさ。(笑)〈六車へ・少し呆れた感じで〉

六車：分かんないもの。尻尾からじゃなくて、頭から差すんだ。

静枝：尻尾から差さないよ。〈六車へ・手をすぼめて手の甲を下に上下させて〉

松下：尻尾から差したらこんなになっちゃうよ。〈六車へ・手の甲を上下させてくねらせる〉

六車：でも干してるから固いんだよ。

松下：だけど、頭から差した方が栄養が行かない？〈みんな大笑い〉

「イワシを田んぼに差す」とはどういうことなのか？興味をそそられながらも、私はまだ具体的にその光景を頭に浮かべることができないでいたのだ。だから、どうやって差すのか、頭からなのか、尻尾からなのか、細かいことにこだわって聞いてみたのである。

こんなふうに、聞き書きでは分からないことはしつこいぐらい詳細に聞いていくことが大切だと私は考えている。聞き手にとって分からないことは、語り手にとってはあまりにも当たり前の事で、問われなければ、あえて言葉で説明することもないような些細なことかもしれない。それでも、聞き書きは、聞きっぱなしではなく、「書くこと」あるいは「表現すること」(今回は、かるたの読み札を作る)を目的として聞いているから、その目的を達成するためには、具体的に頭の中で映像として結ばれるぐ

らいまで詳しく聞かないと、実際に「書く」「表現する」時に困ってしまうのである。

「書くため」「表現するため」に聞くのが聞き書きである、というのは、私が講演等で常に強調している「聞き書き」の特徴である。介護の現場ではこれまでも、利用者さんたちに、どんな人生を生きてきたのか、どんな経験をしてきたのかといったことを聞くことは、利用者さんを理解するために重要だとされてきた。でも、その場合の目的は、聞いたことを即ケアに生かすとか、聞いたことを手がかりに問題を解決する、といった支援を目的としたものであった。

介護民俗学の聞き書きでは、差し当たって、支援を目的とすることから離れて、聞き書きしたことを、表現して形に残すことに集中するのである。すなわち、聞き書きの場においては、スタッフは、支援者ではなく、表現者として利用者さんに向き合う。そうすると、それまで当然のごとくスタッフと利用者さんとの間に存在していた支援する側／される側という固定的な関係は逆転し、今度は、利用者さんが表現者である私の表現活動を助けてくれる存在になったり、あるいは表現に協力する相棒になったりするのである。「聞き書き」の時間は、支援者と利用者として関わっている時よりも、そうした立場の違いを超えて、人と人として向き合える、そんな実感を持つことができる。

だから、表現できると思えるまで、しつこいぐらいに細かい部分を確認しようとする私に対して、語り手である静枝さんは呆れながらも、孫にでも教え諭すように、「イワシの差し方」について丁寧に教えてくれようとするのだ。

六車：穴を掘って差すの？〈静枝さんへ・両手で穴を掘るしぐさ、そこに人差し指を下に向けて差す感じ〉

静枝：ちがうよ。稲が植わってるでしょ。〈近くにあるコップを稲に見立て、その底の方に人差し指を刺す感じ〉

六車：稲がこう植わってるよね。〈紙に稲の絵を描く〉

静枝：そうそうその根元に差す。〈その絵を覗き込んで〉

六車：頭からこうやって差すわけ？〈さらに稲の根元にイワシを差しこむ絵を描く〉

静枝：そうそう。

## 8 | みんなの共同作業で読み札を作る—そしてみんなハッピーに

ここまで細かくしつこく聞いてやっと私の頭の中で、イワシを田んぼに差す光景がくっきりとイメージできたところで、すでに40分以上が経過していた。午後のレクリエーションの時間の内に、なんとか静枝さんの読み札を作れるか。

これまでの聞き書きの形と違って、「すまいるかるた」を作るにあたって私は最初から、かるたの読み札を作るプロセスもみんなの共同作業によって進めたいと思っていた。なぜなら、これまですまいるほ一むで行ってきた聞き書きは、前述したように物理的な制約によって結果的にみんなを巻き込んだオープンな対話になっていたが、それを表現することそのものは（たとえば、文章にまとめるとか、人生すごろくを作るとか）、聞き手である私や他のスタッフの側に占有される、いわば密室の作業になっていたからである。それはそれで、利用者さんの言葉に静かに向き合い、思考を深めていく大切な時間であるし、作品の完成度を高めるためには、何度も試行錯誤したり、時間をかけて推敲を重ねることは必要なことではある。けれど、せっかく聞き書きの場では、スタッフと利用者との関係がフラットになり、ともに協力し合いながら語りが展開されてきたのに、表現する段階になった瞬間に、両者の間に垣根ができてしまうのはもったいない気がしていた。利用者さんもスタッフも一緒になって聞き書きの表現者になる方法はないか、と私はずっと密かに思い悩んでいたのである。

そんな時に、「すまいるかるた」を作る、という企画が持ち上がった。かるたの読み札程度の短い文章だったら、みんなでわいわい言い合いながら、即興的に作ることができるかもしれない。「かるた」はそもそも「遊び」なんだから、聞き書きも、読み札作りも、「遊び」感覚でやってみ

るのもいいかもしれない。そんな軽いノリで、「すまいるかるた」の読み札作りは、オープンな対話である聞き書きの延長に、みんなの共同作業で進めるようになったのである。その結果、最初に紹介したように、予想以上に面白い読み札ができあがっていったのだった。さて、静枝さんの読み札はどんなふうができあがっていくのか。

六車：じゃあ、静枝さん、そろそろ今まで聞いたことをもとにかるたの言葉を考えなきゃいけないけど何にしようかな。〈メモを見直しながら〉

静枝：はい。

六車：いろいろ聞いてどれもすごく面白かったんだけど、やっぱり今回はイワシのことをかるたにしたいな。いい？

静枝：うん、うん。

六車：えー、大きな魚に…。〈メモを眺める〉

静枝：追われてくるの。〈天井を見ながら、考えるように〉

六車：大きな魚に追われ…。

松下：追われたイワシがはっちゃがり。

六車：うん、うん。〈書き留める・静枝さんは六車のメモを覗き込んでいる〉

六車：えー、バケツを持って…。

静枝：バケツとかね、袋とか持ってね。でも昔はビニールの袋なんてないよね。今はあるけどね。昔は、ブリキのバケツだった。

六車：大きな魚に追われたイワシがはっちゃがり、バケツを持って海に跳んでった静枝さん。

〈みんな、大笑い〉

松下：面白いね。なんか頭に浮かぶようだね

六車：一目散に跳んで行きそうだよ。かけっこ速かったでしょ。〈静枝さんへ〉

静枝：速いよ、一番。〈六車へ・照れくさそうに〉

六車：じゃあイワシ拾いも負けたことなかったね。(笑) 聞き手である私が紡ぎ出す読み札の言葉に、語り手である静枝さんやスタッフの松下さんも次々と言葉を足していき、みんなの共同作業でだんだんと読み札ができあ

がっていく。

六車：「大きな魚に追われたイワシがはっチャがり、バケツを持って海に跳んでった静枝さん」まで書いたからね。それを、カワラ（海岸のこと）に…。  
〈メモを見ながら〉

静枝：…干して。〈メモを覗き込んで〉

六車：カワラに干して。

静枝：乾いたら、田んぼの肥やしにする。

松下：田んぼに差すんだよね。

静枝：差す手間のない家は、粉にして撒く。〈松下さんへ〉

六車：ああ、その方が簡単だよ。

静枝：簡単だけどね、頭から差した方が効くだよ。〈松下さんと六車を交互に見て〉

六車：差した方が効き目がいいんだ。それも面白いね。すごい。

客4：初めて聞きました。

「差す手間のない家は粉にして撒いた」。でも、「丸のまま頭から差した方が効果はある」という。これはこの段階になって初めて聞いたことだった。肥料といえば粉にして田んぼや畑の全面に撒いた方が効率的で効果も上がりそうだと考える私たちの常識を見事に覆す静枝さんの経験を、私はぜひとも読み札の言葉に入れたいと、思った。もはや今回の聞き書きの相棒となった松下さんも、同様の驚きがあったようだ。

静枝：今の人じゃ分からないよね。〈客4と松下さんに向かって〉

松下：だいたい肥料って粉になっているからね。イワシを差すってというのは初めて聞いたよ。でも差すとさ、田んぼって水がはってるから、イワシがふやけて下に沈んでって、だんだんと土に馴染んで肥料になるんじゃないのかな。〈静枝さんとトヨさんに向かって〉

静枝：そうそう。

トヨ：頭いいね。〈松下さんへ〉

松下：頭冴えてるかも。だから生のままだとよくない

かるた2

大きな魚に追われたイワシが  
はっチャがり、バケツを持って  
海に跳んでった静枝さん。  
カワラに干して、乾燥させた  
イワシを田んぼに刺す。  
粉にするよりよく効くだ。

出所：デイサービスすまいるほーむ

んだよね。

静枝：そうそう、腐っちゃうから。

そんなやり取りを心地よく聞きながら、私は読み札の言葉を考えるのに集中した。そして。

六車：できた！静枝さん、いい？補足してくださいね。

〈静枝さんへ・大きな声でゆっくりと〉「大きな魚に追われたイワシがはっチャがり、バケツを持って海に跳んでった静枝さん。カワラに干して、乾燥させたイワシを田んぼに差す。粉にするよりよく効くだ」(かるた2)

静枝：うん、はい、そう。(笑)〈メモを見て深くうなづく〉

〈みんなから拍手がわく〉

六車：これでいい？大丈夫？

静枝：うん。その通り。

六車：よかった。ああ、いい話聞いたな、今日。知らないことばかりだ。

文子：ほんとね。

トヨ：昔の人は頭がいい。

松下：そうだね。〈糸み子さんに六車のメモを見せて〉  
面白いでしょ。静枝さんが浜に行ったのが頭に  
浮かぶでしょ。

糸み子：娘時代の？

松下：娘さんの時代だよ。

みんなの共同作業によって、聞き書きから静枝さんの読み札がひとつできあがった。語り手である静枝さんも満足してくれたし、私の気分も高揚していた。そして、拍手や笑いが自然と沸いたように、そこに参加したみんなも心地よい時間を過ごしてくれたようだった。最後に、私の隣に座り、そこでのやり取りを顔きながらずっと見守っていたレビー小体型認知症の文子さんが、「ほんとね」と微笑んでくれたのも、私はとても嬉しかった。

こんなふうに聞き書きの場全体がハッピーな雰囲気になって終わりを迎えられるようになったのは、「すまいるかるた」作りを始めてからのことである。それまでは、もちろん聞き書きそのものは同じようにみんなで盛り上がるのだが、時間が来て終わりにしても、その場では聞き書きは聞きっぱなしで形にもなっていないし、まとめもしないから、参加者にとっては尻切れ蜻蛉であり、盛り上がった気持ちのやり場のない不完全感が残ったままだったように思う。少なくとも、みんなが笑顔になって、拍手が起こる、等ということはなかった。

「すまいるかるた」では、聞き書きを読み札というひとつの形に表現する作業を共同で行い、読み札が完成するまでのすべてのプロセスを共有する。それによって、できあがった読み札にみんなが納得し、「いい札ができた」「よかった」という幸せな気持ちで終わりを迎えられるのだと思う。そして、次回に自分の読み札はどんなふうにならされていくのか、という期待と希望を抱けるようになるのではないだろうか。

今回は、静枝さんは私が最終的に作った読み札の言葉にすぐに満足してくれたが、時には、語り手本人や、他の参加者から、「分かりにくい」とか、「この部分が言葉足ら

ず」といった容赦ない異議申し立てがあることもよくある。そういう時には、みんなが納得するまで、協力して吟味を重ねればいい。オープンである、ということは、読み札の言葉をまとめる側にとっては、自分の文才や言葉に対するセンスが問われたり、緊張を強いられたりすることでもあるが、語り手本人も含め、他の参加者の知恵と力が集まって、自分ひとりでは考えつかなかった面白くて奥深い読み札ができていく、そんな可能性も開かれているということなのである。

## 9 | おわりに一聞き手の専門性とは何か

「すまいるかるた」の静枝さんの読み札は、以上のようなプロセスによって作り上げられた。そして、そこでのやり取りをできるだけ詳細に再現し、分析することで次のような「聞き書き」の特徴が浮かび上がってきた。

- ①聞き書きは、聞き手の「もっと聞きたい衝動」から始まる。
- ②聞き書きはみんなを巻き込んだ「オープンな対話」で進み、それぞれが自分の「役割」を果たしていく。
- ③新しい話題に遭遇したら素直に驚き、興奮する。それが聞き書きの原動力になり、聞き書きの場の関係性を変化させていく。
- ④聞き書きにルールはなく、ただ大人としての配慮さえあれば、誰でも参加しやすい場ができ、予想もつかない自由な展開が期待できる。
- ⑤聞き書きは、支援することからいったん解放されて、「表現すること」を目的とするから、表現できるまで、映像として結べるまでしつこく聞く。
- ⑥読み札作りもオープンに、みんなの共同作業で進めて創作のプロセスを共有することで、最後にはみんなが満足し、幸せに包まれて終わることができる。

そして、もうひとつ、今回の分析によって私自身がはっきりと自覚したことがある。それは、聞き手となった私の存在が予想していた以上に目立っていない、ということである。実は、聞き書きの仕切り役としての私の存在や言葉が、他の参加者に対して指導的、もしくは先導的

に働いているのではないか、という心配を私は常にどこかでしていたのである。そうした懸念を持っていたのは、拙著の読者や講演の参加者からよく、「聞き書きは、民俗学を専門としてきた六車さんだからできるのではないか」という批判を受けてきて、それに対する明確な応答が今までできなかったからだと思う。

けれど、今回、「聞き書き」の映像を分析してみると、前半の聞き書きの場では、私の静枝さんへの質問は、トヨさんや松下さん、糸み子さんといった他の参加者とほとんど回数も内容も変わらないし、後半の読み札作りの時にも、静枝さんの読み札として私が紡ぎだす言葉に、語り手の静枝さんをはじめ、他の参加者の言葉が連なり、それをみんなでわいわいと推敲することで、より洗練された読み札として創り出されていったのだった。

すなわち、介護現場で「聞き書き」を始めた当初は、おそらく私が先導的に進めていただろう「聞き書き」は、もはや「六車由実の聞き書き」ではなく、「すまいるほーむのみんなの聞き書き」になっている、と言えるのである。

それこそ、「聞き書き」が「オープンな対話」に開かれていったことの一番の成果なのではないか。つまり、「オープンな対話」による「聞き書き」では、聞き手ひとりが圧倒的な力でもって先導的に語りを引き出したり、方向性を決めたり、まとめたりする必要がないのである。むしろ、そこに参加する立場や経験の違う多様な人たちの言葉のやり取りが重なり合うことによって、必然的に語りが深まったり、まとめていくための方向性が見えてきたりするのである。だから、「聞き書き」は誰にでもできるのである。

とすると、「聞き書き」の聞き手に専門性はいらないのだろうか。もちろん、民俗学の知識とか、コミュニケーション能力があればそれに越したことはない。けれど、もっと大切なことは、介護現場における「聞き書き」の場が常に誰に対しても開かれていて、誰もが平等にそこに参加できるということを常に自覚し続けることであり、開かれているからこそ起こる予想に反した展開を面白がるゆとりである。そして、そのための場を作り、保ち続

ける「さりげない努力」ではないか、と私は思う。

こうやってしまっっては、かえって「聞き書き」のハードルが高くなってしまいかもしれない。けれど、今回の分析で浮かび上がってきた「聞き書き」の6つの特徴を踏まえながら、まずは、「オープンな対話」による「聞き書き」で、かるた作りから始めてみることをお勧めしたい。きつと、かるた作りから生まれてくるクリエイティブな共同作業の場を体験することによって、そんな場を自分の現場でも作り、保つための「さりげない努力」をしたくなるに違いないから。介護現場を、「オープンな対話」による「聞き書き」で、もっと豊かで創造的に！

#### 〈追記〉

本文では触れられなかったが、本稿でキーワードとして私が使っている「オープンな対話」という言葉が、現在、精神医療の現場で最も注目されている「オープンダイアログ」に触発され、その考え方に影響されたものであることは言うまでもない。だが、今の段階では、私が介護現場で実践してきた「聞き書き」を、「オープンダイアログ」に関連付けて説明するには、私の「オープンダイアログ」に対する理解が十分とは言えない。いずれ、「オープンダイアログ」についての理解をさらに深めて、稿を改めて議論したいと思う。